

平成 26 年介護等体験談

特別支援学校〈吹田支援学校〉

「支援教育とは、教育の本流ではないが源流である」という校長先生のお言葉を聞いて、少しでもその意味を理解し、触れたいという思いで介護等体験に取り組んだ。

グループティーチングを実践している学校だと聞いていたので、クラスでの活動は少なかったが、給食や朝・帰りの会等では学級として成立しており、学級編成のバランスがしっかりと考えられていると感じた。

生徒のできること、できないことによって役割分担がされており、自立活動へとつながるように「自分のことは自分でする」、「自分でできることは自分でする」といった配慮がされていた。

2 日間ではどこまでしてあげるべきかの見極めが難しく、長時間の指導経験や教員間での情報の共有、障害や個性の理解が欠かせないと感じた。この要素は生徒を「叱る」時にも必要なものである。なぜいけないのか、どうすればよかったのかをきちんと伝えるには生徒それぞれに合った叱り方がある。

問題点を改善するための動機付けとなるように対応の仕方を考えることが大切であると思う。

これまで私は「支援＝助ける」というイメージが強かったため、支援教育も同じように障害のある生徒を「助ける」ための教育であるという印象が強かった。そのため、教員も優しく接していると思っていたが、実際は決してそうではなかった。厳しい口調で注意をすることもあれば、自分でできると判断すれば手を貸さないことが多い。

しかし、どの教員も「生徒のために」という想いがあり、「自分でやれることをできるようにしてあげる」ということこそが支援教育の目的であるのだと思う。生徒のために想うからこそその厳しさは、優しさがあつてのことだと感じた。

これは普通教育においても欠かせない考えだと思う。また、インクルーシブ教育が進もうとしている現代の学校社会において、教員が「支援」とは何かと考えることは、とても意味のあることなのではないかと思う。